熊本ごはん組に支援金を助成
～「夢を持てる米づくりで熊本のいとなみ復興プロジェクト」を応援～

12 月 21 日、阿蘇市農村環境改善センターにおいて、「夢を持てる米づくりで熊本のいとなみ復興プロジェクト」の事業発表会並びに支援金の目録贈呈式が行われました。

2017 年 12 月 21 日（阿蘇市農村環境改善センター・農事研修室）

食産業復興支援

12 月 21 日、阿蘇市農村環境改善センターにて、キリン株式会社と熊本県、日本財団の 3 者協定に基づく『「復興応援キリン絆プロジェクト」熊本支援』の一環として、「熊本ごはん組」へ支援金 700 万円を助成した。
熊本ごはん組は、県内の 26 名の若手米農家同士がつながりを持ち、熊本地震からの復興を契機とした新たな取り組みを行うことを目的に、平成 28 年 7 月に設立された任意団体。贈呈式に先立ち、同団体の代表を務める森 賢太さんらが、地震被害のあった米づくりを夢のある産業へと再生させるために取り組む「夢を持てる米づくりで熊本のいとなみ復興プロジェクト」の事業概要発表を行った。
発表では、稲作勉強会や熊本在来品種「穂増（ほまし）」の栽培、米の加工品開発、地域のしめ縄再生、新米お披露目会（米農家マルシェ）の開催など、同プロジェクトで行う具体的活動について、同団体メンバーが説明。今回の支援金は、勉強会・イベントの開催や加工商品の開発、パンフレット作成・情報発信などに活用される。さらに、贈呈式を終えた後、試験的に栽培を行った熊本在来品種の米「穂増」の試食会も行われ、参加者は色、ツヤ、食味などを確かめていた。

復興応援 キリン 絆プロジェクト
笑顔で結ぶ。人を、日本を。

コメント①

熊本ごはん組　代表　森 賢太 様

熊本地震を受け、県内の若手農家で「何かできないか？」との思いで設立したのが「熊本ごはん組」です。プロジェクトを立ち上げるに当たっては、メンバーで何度も夜遅くまで話し合いを重ね、キリングループ様からもアドバイスをいただきながら、ようやく形になりました。今回、ご支援をいただく事業は、目標を決め成果を上げるというものではなく、米づくりに例えるなら「種をまき、苗を育てる」までというイメージです。一見、地味な取り組みですが、皆さまには５年後を見据えて温かく見守っていただければと思います。

コメント②

熊本ごはん組　副代表　内田 智也 様

今回、キリングループ様、日本財団様から、私たち「熊本ごはん組」の「夢を持てる米づくりで熊本のいとなみ復興プロジェクト」の温かいご支援と激励をいただき、身の引き締まる思いです。これからの米農家は、「米を作って売る」以外に、「米や米づくりのことを（消費者に）伝えていく」という役割も果たす必要があるとの思いから、団体名を付けました。今回いただいたチャンスを生かし、プロジェクトを通じて「こんな地域にしていきたい」「米づくりで地域を明るく照らしたい」という米農家が増えるようにしていければと思います。

コメント③

熊本ごはん組　チームリーダー　堀永 圭佑 様

私は「熊本ごはん組」で加工品販売チームのリーダーを務めており、現在、メンバー５人で活動しています。昨今、外国の食文化の流入による米食の機会減少や子どものアレルギー問題、熊本地震など大規模災害の際の非常食などをキーワードに、加工品の開発を進めています。具体的には、米粉を使った麺類やお菓子、焼き米を使った離乳食・介護食・非常食、麹を使った加工品などを軸に試作・試食を進めていく予定です。この取り組みが、米の消費の底上げや米農家の結びつきを強めることにつながり、現在の米産業のイメージを変えるきっかけになればと思います。

コメント④

熊本ごはん組　経理　實取 義洋 様

私自身、新規就農する際に、周囲から「農業はやめておけ」と止められた経験があり、それほど農業は夢のない産業なのかと痛感していました。それでも、米農家同士が集まれば、米づくりの面白さについて尽きることなく話をします。私が担当する「バケツ稲」では、稲が育つ過程で米農家が味わっているさまざまな感動を、米農家以外の方々にも感じてもらいたいとの思いで取り組んでいます。５年後、10年後に、田んぼと同じ状況が見えるバケツ稲が、観葉植物のように皆さんの身近になり、「お米っていいよね」と思っていただければ嬉しいです。

コメント⑤

熊本ごはん組　チームリーダー　水口 啓太郎 様

熊本の在来品種「穂増」は、1833 年に現在の八代市周辺で栽培が始まった品種で、当時「東の掛川米、西の肥後米」と言われ、国内 1 ～ 2 を争うほどの評価を得ていたそうです。今年度は御船町で 40 粒の種もみを栽培し、将来的には作付面積を拡大して熊本県の奨励品種を目指しています。来年(2018 年) 以降は、菊池市、七城町、八代市など県内 7 カ所に栽培地を増やし、秋の収穫後は試食会を開催する予定です。また、栽培を通じて「穂増」に興味を持つ販売店が出てくれば、試験販売を行うこともできると思います。

コメント⑥

キリンビール株式会社熊本支社長　安武 直幸

『「復興応援 キリン絆プロジェクト」熊本支援』では、“絆を育む”をテーマに、「食産業復興支援」「地域の活性化支援」「心と体の元気サポート」という 3 つの柱を掲げて活動を行っています。今回の「熊本ごはん組」への助成は、そのうちの「食産業復興支援」や「地域の活性化支援」につながるものと思います。キリングループでは、「世界一の九州をつくろう。」というミッションを掲げ、「熊本にしかないもの」「熊本ならではもの」を応援しようという活動を行っています。今回のプロジェクトへの支援は、その取り組みにも通じるものがあります。キリングループでは、今後もさまざまな形で地域に貢献できればと考えています。

コメント⑦

公益財団法人 日本財団　経営企画部長　萩上 健太郎 様

今回、『「復興応援 キリン絆プロジェクト」熊本支援』の一環として、「熊本ごはん組」のプロジェクトを支援することになりましたが、「ごはん」という名前は、プロジェクトを進める上でとても重要だと思います。それは、彼らがプロジェクトの活動を通じて目指すのが、「ものづくり」ではなく「ことづくり」であり、米づくりにとどまらず「文化」「営み」をつくるという思いがあるからです。さらに、米づくりを行う農家と消費者が「知りたい、知られたい、つながりたい」という好循環の関係になっていきたいとの思いも込められているのではないでしょうか。今回のプロジェクトが、夢のある米づくりが未来へとつながれていく、きっかけになればと思います。

コメント⑧

東海大学農学部　教授　阿部 淳 様

日本の農業の担い手は高齢化が進んでおり、その平均は 66 歳と言われています。それが、今回の熊本地震のような大規模な災害が起こると、離農など相次ぎ、さらに一層 (高齢化が) 進んでしまいます。米づくりも 10 ～ 20 年前に比べ単価が大幅に下がり、大規模化しなければ収益性が上がらない状況です。そうした中で「熊本ごはん組」の取り組みは、ストーリー性に富んだ品種の栽培や若い米農家を集めての勉強会、しめ縄再生など、身近なところから活動を始めており、若い米農家はもちろん新規就農者なども含め、“仲間”や“広がり”を生みやすいのではないかと期待しています。

コメント⑨

厨子農園代表　熊本ごはん組講師　厨子 圭介 様

「熊本ごはん組」が行っている稲作勉強会で講師を務めています。私自身、東海大学農学部 (阿蘇キャンパス) で学んだのをきっかけに、５～６年前に新規就農しました。大学で学んだ理論だけでなく、私自身の経験を通して得た知識を皆さんにお伝えしています。米づくりにも収益性が求められる中、「どのタイミングで、どの肥料をやるか」といった部分をしっかりと理解して栽培を行うことで、いい米をたくさん作ることが出来ます。今後も、「熊本ごはん組」の活動をサポートさせてもらいながら、日本の米文化、米食文化を広げていければと考えています。